



リニューアルした「神恵内オリジナルカップうどん」

村産のホタテやタケノコ、コンブの粉末、道産の小麦粉を使用し、このカップ麺、一般商品として販売事業

平成21年、北海道神恵内村では、村民と行政の協働で特産品開発を進め、村内のホタテ生産者や商店経営者、漁協職員などが協議会（通称・チームカップ麺）を立ち上げて、『神恵内オリジナルカップうどん』を5万個、開発・製造した。「地産地消」「安心・安全」をテーマに、神恵内

へと展開するに製造コストがネックとなり、試作品として村内外に配布と

いうかたちにしたところ、大きな反響を呼び、その後に行われたアンケート調査でも味・具材・パッケージなどに高評価が集まる結果となった。今回は、そうしたアンケート調査などに基づき、大幅なりニューアルを行って新生・カップ麺として再登場した。前回同様「地産地消」「安心・安全」、そして「食べられるPRパンフレット」をテーマに開発し、帯



神恵内オリジナルカップうどんがリニューアル 本年4月に販売して5月中旬に完売 北海道神恵内村

電源地域 振興トピックス

産品開発や交流人口拡大に向けた取り組み

このコーナーでは電源地域各地の地域振興の話題を取り上げていますが、今回は北海道神恵内村と福島県敦賀市の話題などをお届けします。読者の皆様の中で、こうした話題の発信希望をお持ちの方はご連絡ください。

E-mail: furusato@dengen.or.jp



今年、敦賀市は「敦賀ー長浜間鉄道開通130周年」「敦賀ーウラジオストク定期航路開設110周年」および「欧亜国際連絡列車運行100周年」の佳節を迎える。これを契機に様々なイベントを行っていている団体等と連携し新規および既存のイベントに、こうした鉄道開通記念等の統一テーマを付加する『つるが「鉄道と港」フェスティバルイヤー』を展開する。

内容は、イルミネーションあるいはライトアップによる「夜の敦賀港」を演出する事業、敦賀鉄道の夜明け130年の歴史をイメージした「食」を提供する事業、テーマパーク、遊園地等アミューズメント機能を有した「遊び」を演出する事業、アウト

レットモールをイメージした「買う」を演出する事業など。7月20日のオープンングに始まり、従来の大型イベントに併せて、観光物産フェアや商店街でのイベント、展覧会、見学会、記念クルーズ、体験ツアー、ミニライブなどのプログラムがぎっし



鉄道と港をイメージしたイルミネーション・ライトアップ

プログラム満載の「つるが「鉄道と港」フェスティバルイヤー」が開幕

福島県敦賀市

広市の(株)とかち麺工房が製造した。価格は1個300円(税込)。3,280個を製造して村内の『道の駅』と『リフレッシュプラザ温泉998』で販売したところ、5月中旬に完売するという人気商品になった。

上げられている。スープと麺、具材の相性も抜群で、素材本来の風味や食感を楽しむことができる。今の段階では、販売ロット数や価格面で利益が出るところまでには至っていないが、「神恵内村」を体感できる文字通りの「食べられるPRパンフレット」の役割は十分に果たしており、今後のさらなる展開に注目が集まっている。

りと組み立てられている。これに関連した菓子やお茶、ワイン、駅弁などの新商品6商品も開発された。

この通年イベントの催行には、県・市や経済団体などと市民が協同で、「敦賀・鉄道と港」まちづくり実行委員会を昨年12月に結成した。

行政や各種企業と市民との「協働」によって「鉄道と港のまち敦賀」のまちづくり」に対する市民意識の醸成を図ろうとするもの。今年の敦賀は熱い1年になりそうだ。



『つるが「鉄道と港」フェスティバルレイヤー』の統一ロゴマーク

詳しくは専用ホームページ：www.tsuruga.or.jp/tetsudo130/index.html。

福島県で全原商が「地域振興懇談会」を開催

5月29日（火）、福島県郡山市で『全国原子力立地市町村商工団体協議会』の主催（事務局・柏崎商工会議所）による「地域振興懇談会」が開かれた。



郡山市内で開催された「地域振興懇談会」風景

全国の原子力立地市町村の25の商工団体の代表者が一堂に会したこの会合では、富岡町商工会副会長から福島第一原子力発電所事故以降の地域の状況、大熊町商工会と双葉町商工会の企業経営者からは、再建に向けた取組事例などが報告され、厳しい状況下にあるながらも、復興に向けて前向きに歩む商工業者の具体的な活動が紹介された。

翌30日（水）には、福島第二原子力発電所を視察して、3・11大震災後の被害状況や復旧現況の説明などを受けた。

仮設住宅に仮設の店舗が次々とオープン

会津若松市にある大熊町最大の松長近隣公園仮設住宅地域内にあるのが仮設店舗「おみせ屋さん」。昨年10月17日にオープンした。約60坪の食料品や日用品が並ぶ店内の半分は、テーブルと椅子が置かれたコミュニティスペース。雪深い地域の仮設に暮らす約200世帯の人々にとっては買物のみならず、情報交換の場として欠かせない存在になっている。

富岡町民が避難する大玉村にある安達太良仮設住宅前にも、仮設店舗「富岡えびすこ市場」がオープンした。かつて富岡商店街で開催していた活気溢れる「えびす講市」にあやかったもので広さは約28坪。運営は富岡町商工会や個人の8事業者が集まって設立した「合同会社・富岡さくらの郷」だ。大玉村の仮設住宅には約300世帯が避難している。「合同

会社・富岡さくらの郷」では「足」のないお年寄りでも安心して買物ができるという利便性をもち、大玉村の住民とのコミュニティの場として仮設に暮らす人々に憩いの場を提供する、賑わいのある店舗を目指している。今後は仮設住宅を巡り積極的に注文取りを行うほか、小型トラックによる移動販売なども手がける。



会津若松市の「おみせ屋さん」



大玉村の「富岡えびすこ市場」

福島県大熊町・富岡町

